

12. 痙性麻痺手に対し選択的痙性コントロール手術を行い

上肢機能が改善した 1 例

倉敷平成病院整形外科¹，倉敷平成病院リハビリテーション科²

○渋谷 啓¹，石井 祐子²

痙性麻痺手に対して選択的痙性コントロール手術が有用であった 1 例について報告する。61 歳男性，くも膜下出血後遺症(14 年前発症)，左片麻痺，ADL 自立し独居生活。Brunnstrom recovery stage 上肢 V 手指 V 下肢 V。前腕回外制限(35°)，手関節背屈制限(45°)，手指屈筋群の緊張を認めた。母指はボタン穴変形，II-V 指にスワンネック変形を認めた。簡易上肢機能検査(STEF)は 12 点であった。

手術は前腕回内筋(円回内筋・腕橈骨筋)，手関節屈筋(橈側手根屈筋・尺側手根屈筋・長掌筋)，手指屈筋(長母指屈筋・深指屈筋・浅指屈筋)，手指内在筋(母指内転筋・短母指屈筋・虫様筋・背側骨間筋・掌側骨間筋・短小指屈筋)に対して腱延長(筋間腱延長)を行った。術後 10 日間の安静固定の後，作業療法を開始した。最終評価では前腕回外角度(45°)，手関節背屈角度(55°)は増加した。手指の緊張は軽減し，スワンネック変形は目立たなくなり，随意性・分離性が向上した。STEF は 30 点に改善した。患者本人の手術治療に対する満足度は高かった。